



「夢」 ゆめ

實相寺花園会報

前禅昌寺住職

烟霞室 えんかしつ

磯部文保 長老 大師 いそべ ぶんぽ

令和元年 十二月一日発行
発行所

臨濟宗妙心寺派
陽明山 實相寺
實相寺花園会

〒761-0450
高松市三谷町
1811番地1

TEL087-889-3838
編集発行人
山本文匡
http://www.jissouji.net

第128号

調べると昨年の十二月は天龍寺の関牧翁管長の「夢」を紹介していましたが、今年は中学時代お世話になった師匠の「夢」です。現代では「夢」は叶えるべき「ドリーム」の意味が強いですが、元々は「はかない、まぼろし」の意味でした。今年もあつと言つ間に過ぎ、人生は夢のようです。



香川県 <https://www.my-kagawa.jp/point/3522/>



高松市 <https://www.art-takamatsu.com/jp/travel/sightseeing/entry-493.html>

「坐禅会が紹介されました」
十月に「香川県観光協会」が運営する「うどん県旅ネット」に、十一月には高松市観光交流課が主催する「エクスペリエンス高松」のホームページにそれぞれ實相寺の坐禅会が紹介されま

した。インターネットを御利用の方は、ご覧下さい。そして皆様も是非一度坐禅会にご参加下さい。

「私ならざるもの」

今年四月より連載を続けてきた『花園』誌のコラムですが、残すところ後二本と

なったところで四苦八苦しております。

二月号は「擔雪填井」(雪を担って井を填む)とタイトルは早くから決めてはおり

しましたが、なかなか筆が進まずグズグズしている為、こちらの発送も遅れていきます。と言っことで花園原稿の草稿として書き進めて参りたいと思います。

宋時代の禅僧、雪竇重顕(せつごうじゅうけん)禅師の語録『祖

英集』に「徳雲の閑古錐、幾たびか妙峰

頂を下る。他の癡聖人を喚んで、雪を擔つて共に井を填む」という詩があります。

『華嚴経』には、悟りを求める善財童子が五十三人の善知識を尋ねながら南方を

旅する様子が説かれています。『徳雲』とは童子が最初に出会う比丘の名です。

ちなみに東海道が五十三次になったのはこの「入法界品」に由来するとの説もあります。「閑古錐」とは使い古して先が丸

くなつた錐のこと。転じて長年の修行の末、擦り切れた境涯のことです。「癡聖人

とは布袋和尚や良寛さんの様に市井に在つて愚に徹した聖人のこと。この徳雲比

丘は和合山という高い山に住んでいたのですが、時々山から降りてきては、他の

癡聖人と一緒に雪をかついで井戸を埋めた、というのです。

しかし井戸の中にくら雪を投げ入れても、溶けるばかりで井戸が埋まる筈はありません。全くの無駄仕事です。誰し

も「そんなことして何になる」と言いたくなりませんが、本当に無駄でしょうか。

私達は何ごともつい結果を求めます。特に現代ではより費用対効果が求められますが、そうした風潮が私達自身を苦しめているのではないのでしょうか。

十月より「土曜ホットライン電話相談」

を月に一度担当していますが、今、多くの方が様々な理由で悩んでいることを実感します。ただ共通しているのは「こんなことして何になる」、「報われない」という思いだと感じます。

一方、先月、研修会で講師の老大師からこんな話を聞きました。一人の雲水さんが、「よし、今日は呼吸に意識を集中して歩いてみよう」と托鉢されたんだそ

です。すると不思議と道を間違えることもなく気づいたら全部回っていて、「まるで呼吸に連れて行って貰った様です」と報告したそうです。老大師は「そういう自然にあらわれる、私ならざるものが大切だ」と仰っていました。

私達は普段「私が生きている。私のいのちだ」と思っていますが、本当に自分のいのちであれば、自分の思い通りに心臓を止めたり動かしたり出来るはずですが、しかしそんな事は誰も出来ません。という事は、私ならざるものが私達を生かしてくれているのです。その私ならざるものには、「私の損得勘定」から離れないと、けして出会うことは出来ないのです。よう。